



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

『ユリシーズ』を楽しく読むために
ージョイス、フローベール、パロディ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2023-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新名, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34481/0002000059

『ユリシーズ』を楽しく読むために

——ジョイス、フローベール、パロディ¹

新名桂子

How to Enjoy *Ulysses*:
Joyce, Flaubert, and Parody

Keiko SHIMMYO

序

「僕は沢山の謎とパズルを仕込んだので、何世紀もの間、大学教授たちがその答えを探すのに忙しいことだろう。それが不滅性を確保する唯一の方法なんだ」(Ellmann 521)——James Joyce (1882-1941)が*Ulysses* (1922)のフランス語への翻訳者Jacques Benoist-Méchinに言ったとされるこの言葉は『ユリシーズ』のテキスト性を見事に表現している。本論では、ジョイスの仕掛けた「謎とパズル」の答えが分かると『ユリシーズ』がどのように深く、また楽しく読めるかを示したい。

『ユリシーズ』は、ホメロスの『オデュッセイア』のパロディと言われ、ジョイス自身が創作の計画表を示してそれを証明しているくらいだが、実は、『オデュッセイア』以外にも多くの原テキストがある。その中でもGustave Flaubert (1821-1880)の文学は大変重要である。しかし、『ユリシーズ』とフローベール文学の関係性への研究者の関心は、例えば『ユリシーズ』と『オデュッセイア』の関係性への関心に比べると永らく控えめなものであった。それが、Scarlett Baronの精緻で包括的な研究『*Strandentwining Cable: Joyce, Flaubert, and Intertextuality* (2012)によって変わってきている。この流れの中で、まず、ジョイス文学とフローベール文学の関係性に関わるこれまでの研究を概観し、この分野の研究がその重要性にもかかわらずやや立ち遅れてきた状況を押さえ、その理由を考察する。次に、『ユリシーズ』が多くの原テキストを持つパロディ文学であり、その中でも重要な原テキストの一つが*Madame Bovary* (1857)であることを説明する。最後に、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディと分かれば、どのように謎が解けて深く楽しく読めるかを論じる。

1. ジョイスとフローベールの関係性に関する研究

(1) 研究の概観

ジョイスとフローベールの関係性に関する研究を概観してみよう。本論巻末の付録「ジョ

イスとフローベールの関係性を扱う文献リスト」を参照されたい。『ユリシーズ』が出版された1922年にすでに、ジョイスの天才をいち早く認めて支援していた Ezra Pound が “James Joyce et Pécuchet” というタイトルの書評にて、『ユリシーズ』がフローベール文学、とりわけ、未完の大作 *Bouvard et Pécuchet* (1881) から大きな影響を受けているばかりか、これを凌ぐ完成度に達していると言う (Pound on U and F 263-65)。1934年には、作家の友人 Frank Budgen が *James Joyce and the Making of Ulysses* において、ジョイスは19世紀作家の中でフローベールを最も高く評価していたことを報告した(184)。1948年、Haskell M. Block が、ソルボンヌ大学にフローベールとジョイスの関係に関する最初の博士論文を提出するものの、これは未刊行である。1962年に、Hugh Kenner がフローベール、ジョイス、ベケットを「ストイックなコメディアン」の系譜に並べて見せた。1971年には、Richard K. Cross が *Flaubert and Joyce: The Rite of Fiction* により、フローベールとジョイスの関係に焦点化した初めての研究書を公刊した。1977年には、Michael Mason が “Why Is Leopold Bloom a Cuckold?” において、Charles Bovary と Leopold Bloom の影響関係を指摘している。1985年には、Richard Brown が *James Joyce and Sexuality* において、ジョイスのトリエステの蔵書でフローベールが際立っていること、特に、*Exiles* (1918) の創作ノートを書くまでには『ボヴァリー夫人』が彼の手元にあったことを報告している(22)。2003年には、フランス文学者鹿島茂が『ユリシーズ』は『ブヴァールとペキュシェ』の続編として書かれたという仮説のもと、「フロベールを読み込んで初めて『ユリシーズ』がわかるという部分が少なくない」(663)ことを指摘した。2008年には、バロンがジョイスとフローベールとインターテクスチュアリティに関する博士論文をオックスフォード大学に提出し、これを基に2012年、『*Strandentwining Cable: Joyce, Flaubert, and Intertextuality*』を公刊した。

こうしてみると、『ユリシーズ』刊行直後からフローベールの影響は読者や研究者の間でよく知られていたにもかかわらず、これを追求した研究がそれほど多いわけではないことに気付く。とりわけ、1971年のクロスの『フローベールとジョイス』以降、ジョイスとフローベールの関係性について、論文は出ても研究書は出ない状態が2012年のバロンの『*Strandentwining Cable*』まで40年以上も続いていたのには驚かざるを得ない。

(2) 研究の停滞の理由

フローベールからジョイスへの影響は明らかなのに、なぜ研究がこのように停滞したのだろうか。理由は少なくとも三つ考えられる。第一に、1930年に出た Stuart Gilbert の *James Joyce's Ulysses* により『ユリシーズ』の『オデュッセイア』との共鳴関係が明確に示されたことから、本書を『オデュッセイア』との関係で読む読み方が定着してしまい、その結果、『オデュッセイア』以外の文学との共鳴関係への興味がややそがれてしまったと考えられる。第二に、1960年代末以降、フランスで Julia Kristeva や Roland Barthes を始めとする理論家たちによる文学理論が隆盛をみた結果、『ユリシーズ』と他の文学との共鳴関係を探る地道な作業が低調になったのではないか。第三に、ジョイスの極めて巧妙な書き方により、すぐにはそれとわからないレベルの共鳴関係になっているため、これらが読者や研究者の目をすり抜けてきたと考えられる。

ところで、第三の点に関連して興味深いことがある。『ユリシーズ』がフローベールの『ボヴァリー夫人』からの影響があることを、ジョイスが隠そうとしていたらしいことが、友人

C. P. Curran の証言から推測されるのだ—— “He [Joyce] was interested in Flaubert, less in *Madame Bovary*, according to Curran, than in ‘*La Légende de St. Julien l’Hospitalier*’ and *La Tentation de Saint Antoine*.” (Ellmann 75、下線は筆者)。これはなぜだろうか。

周知のとおり、『ボヴァリー夫人』は、1856年の雑誌連載が検察の目に留まり、1857年、公序良俗に反するとして裁判となるものの、弁護士Marie-Antoine-Jules Sénardの名弁論により無罪となって出版が可能になったといういわくつきの小説である(生島 457頁; トロワイヤ 150-57頁)。そもそも『ユリシーズ』自体が英語圏で多くの出版社から出版を断られたあげくフランスで出版された経緯のある問題の書であることから、ジョイスは、自作ともう一つの世紀の問題作との関係を当面、隠そうとしたのではないか。彼は、すぐには気付かれないような巧妙な共鳴関係を仕組むと同時に、友人にもこの秘密を決して明かさず、『ボヴァリー夫人』への自らの関心をわざわざ否定していると考えられる。このように作家がうまく隠したため、『ユリシーズ』とフローベール——とりわけ『ボヴァリー夫人』——との関係は永らく見過ごされてきたと思われる。

しかしながら、作家がわざわざ自らの関心を否定する行為は、その行為とは裏腹に大きな関心があることを示している可能性がある。筆者は、『ユリシーズ』を『ボヴァリー夫人』のパロディとして読むことの意義を他所で論じているが(新名、「19世紀小説から「ユリシーズ」へ」[2009]; 新名、「『ボヴァリー夫人』のパロディ」[2016])²、次節でこのことの証明を別の角度から再度試みる。

2. 『ボヴァリー夫人』のパロディとしての『ユリシーズ』

『ユリシーズ』が、寝取られ亭主の話がユーモアに包まれてコミカルに語られる物語であるのに対して、『ボヴァリー夫人』は、不貞の妻の話が容赦のない辛辣さで語られ、最後は妻も夫も絶望のうちに死ぬという救いのない物語である。全く読後感が違うことから、両者になんらかの関係があるとは気付きにくい。しかしながら、読後感のこの大きな隔たりは、パロディという概念をつかえばうまく説明できる——『ユリシーズ』は『ボヴァリー夫人』のパロディになっているのだ。このことを、両作品の登場人物の対応関係、およびテキストの共鳴関係から説明する。

(1) 登場人物の対応

登場人物の対応については、拙論からの再掲である表1を参照されたい(新名、「『ボヴァリー夫人』のパロディ」20頁。ただし、一部加筆修正している)。表1から明らかな通り、『ユリシーズ』の登場人物と『ボヴァリー夫人』の登場人物との間には——その読後感の違いとは裏腹に——驚くほど精巧な対応関係が見られる。このことから、『ユリシーズ』を書くに際し、ジョイスが『ボヴァリー夫人』を意識していたことは確かと思われる。

登場人物対応表	
<i>Madame Bovary</i>	<i>Ulysses</i>
Charles Bovary (夫)	→ Leopold Bloom (夫)
Emma Bovary (妻)	→ Molly Bloom (妻)
Rodolphe Boulanger (妻の最初の恋人)	→ Blazes Boylan (妻の恋人)
Léon Dupuis (妻の二人目の恋人)	→ Stephen Dedalus (夫妻の疑似わが子／妻の想像上の恋人候補)
Berthe Bovary (夫妻の娘)	→ Milly Bloom (夫妻の娘)
Rouault (妻の父)	→ Brian Tweedy (妻の父)
Nastasie (妻に追い出される女中)	→ Mary Driscoll (物語開始以前に妻に追い出された女中)

表 1

(2) テクストの共鳴——マルヴィとルーディ

次に、『ユリシーズ』と『ボヴァリー夫人』の興味深い二つの共鳴関係——ブルームの妻 Molly の初恋の人 Mulvey に関するもの、およびブルーム夫妻の夭折した息子 Rudy に関するもの——を示す。

まず、マルヴィについて検討する。モリーは、初恋の人がマルヴィだったことをブルームに話していたらしく、ブルームの意識の反映と考えられる第 13 挿話後半と第 17 挿話に、以下の通り合計 4 回言及がある。

First thoughts are best. Remember that till their dying day. Molly, lieutenant Mulvey that kissed her under the Moorish wall beside the gardens. Fifteen she told me.

(13. 888-90、下線は筆者)³

. . . frillies for Raoul de perfume your wife black hair heave under embon *señorita* young eyes Mulvey plump bubs me breadvan Winkle red slippers she rusty sleep . . .

(13. 1281-83、下線は筆者)

What other infantile memories had he of her [Milly]?

15 June 1889. A querulous newborn female infant crying to cause and lesson congestion. A child renamed Padney Socks she shook with shocks her moneybox: counted his three free moneypenny buttons, one, tloo, tlee: a doll, a boy, a sailor she cast away: blond, born of two dark, she had blond ancestry, remote, a violation, Herr Hauptmann Hainau, Austrian army, proximate, a hallucination, lieutenant Mulvey, British navy.

(17. 864-70、下線は筆者)

What preceding series?

Assuming Mulvey to be the first term of his series, Penrose, Bartell d'Arcy, professor

Goodwin, Julius Mastiansky, John Henry Menton, Father Bernard Corrigan, a farmer at the Royal Dublin Society's Horse Show, Maggot O'Reilly, Matthew Dillon, Valentine

Blake Dillon (Lord Mayor of Dublin), Christopher Callinan, Lenehan, an Italian organgrinder, an unknown gentleman in the Gaiety Theatre, Benjamin Dollard, Simon Dedalus, Andrew (Pisser) Burke, Joseph Cuffe, Wisdom Hely, Alderman John Hooper, Dr Francis Brady, Father Sebastian of Mount Argus, a bootblack at the General Post Office, Hugh E. (Blazes) Boylan and so each and so on to no last term.

(17. 2132-42、下線は筆者)

マルヴィがブルームの意識に繰り返し登場していることから、ブルームはモリーの初恋の人が大変気になっていることが分かる。このうち、第13挿話889行と第17挿話870行では、マルヴィが海軍中尉(lieutenant)であるとの情報が示されている。つまり、モリーは夫に自分の初恋の人がマルヴィという海軍中尉だったことを話していたのである。

ところで、このマルヴィはどこから来ているだろうか。マルヴィという名は、ジョイスの伴侶(恋人で、後の妻) Nora Barnacle が郷里で若い頃付き合っていた Willie Mulvagh の愛称であることから、この男友達からの影響があるのは確かである(Maddox 201)。しかし、その職業は違っており、『ユリシーズ』のマルヴィが海軍中尉であるのに対し、マルヴァは軍人ではなく、“Joe Young's Mineral Water Factory”の会計係であった(Maddox 204頁と205頁の間の写真の頁の3頁目を参照)。では、マルヴィはなぜ海軍中尉になっているのだろうか。

この謎を解く鍵が『ボヴァリー夫人』にある。以下は、Emma Bovary が、二人目の若い恋人 Léon Dupuis に対して、彼以前に愛した人がいたことを伝える場面である。

ある日、二人 [エマとレオン] がこの世の幻滅について人生観めいた話をしていたとき、エマは、(レオンの嫉妬をためすためか、それとも心のたけをぶちまけずにはいられなかったのであろうか)前に自分は、レオンを愛するまえに、ある男を愛したことがある、とってしまった。「あんたほどじゃなかったけれど」とエマは言葉をつけたした。そして《なんにもなかった》ことをわが娘の命にかけて誓った。

青年はエマの言葉を信用した。が、その人はなにをしていたのかと聞きただした。

「海軍大佐 (capitaine de vaisseau) だったわ」

この答えは、いっさいの詮索をもうふせぎとめること、また同時に、武ばった性格で世間でもちやほやされがちな人を魅惑したようにいうことで自分をりっぱに見せること、ではなかったか？

(354-55、下線は筆者；生島訳 339頁)⁴

エマはレオンに、前の恋人は海軍大佐だったと言う。しかし、これはエマの虚栄心——レオンの嫉妬を試してみたり、自分を大きく見せようという虚栄心——から出た嘘であることが、語り手によって暴露されている。そして、「前の恋人は海軍大佐」というエマの嘘が『ユリシーズ』にも少々修正されて響いており、その結果、マルヴィが海軍中尉になったと考えられるのである。つまり、ジョイスは、マルヴィという名前をノラの昔の恋人からとったけれども、軍人というステイタスはエマの嘘から拝借したことになる。このように、過去に海軍の軍人を恋人に

持っていた女、あるいはそのような恋人を持っていたふりをする女という点でモリーとエマはつながっており、この点からも、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』に負うものがあるのは明らかである。

次に、ルーディに関するテキストの共鳴を見よう。ブルームの意識に何度もよみがえるモチーフの一つに、生後 11 日で夭折した息子ルーディがある。なぜルーディは夭折しているのだろうか。実のところ、ジョイス家には息子 Giorgio と娘 Lucia がいるにもかかわらず、ジョイス家が基になっているはずのブルーム家の家族構成は夫婦に娘一人であり、息子は生まれたものの夭折したという設定である。確かに、Stephen Dedalus を疑似わが子と考えれば辻褃は合うのだが、Brenda Maddox はブルーム家にジョルジオに対応する息子がいないことに疑問を呈している——“If *Ulysses* is, in any sense, a Joyce family album, where is Giorgio?” (205)。彼女は、ルーディの夭折に 1908 年のノラの流産が影響していることを指摘する一方、ジョルジオに対応する息子を『ユリシーズ』に書いていないのは、ジョイスが息子に対して文学的な関心を失っているか、あるいは息子とノラの親密な関係に嫉妬しているからではないかという、かなりネガティブな推測をしている (Maddox 205)。

この問題について、『ボヴァリー夫人』に手掛かりがないか探してみよう。前掲の表 1 から明らかな通り、ブルーム家はブルーム、モリー、Milly の「夫婦と娘一人」の家族構成で、ボヴァリー家もまたシャルル、エマ、Berthe による同様の構成になっている。したがって、ブルーム家の「夫婦と娘一人」の家族構成は、ジョイス家ではなくボヴァリー家の反映と考えれば辻褃が合うのである。

これに関連してさらに興味深いことがある。エマの父親であるルオーが、シャルルとエマの結婚式がすんで彼らが自分たちの家に馬車で帰っていくのを見送りながら、彼自身の結婚式やその時の妻のことをあれこれなつかしく思い出している中に、一瞬ではあるが、死んだ息子の話が出て来るのだ。

そして、自分 [ルオー] の結婚のときのこと、若かったときのこと、妻がはじめて妊娠したときのこと、頭をかすめた。新妻を実家から自分の家へつれてかえった日、妻を馬のうしろに乗せて雪の上をいったとき、自分もあのときはたのしかった。あのとき、クリスマスごろで野原は真っ白だった。妻は片腕で彼にすがり、もう一方は手籠をさげていた。コー地方の風俗の頭巾についた長いレースが風にゆられ、ときどき口にあたっていた。彼がうしろをむくと、肩のすぐそばにばら色の妻のちっちゃな顔があった。頭巾についたまいる金のバッジの下でしずかに笑っていたものだ。彼女は指がつめたいのでときどき彼の胸のところへ入れてきた。みんな、みんな遠いむかしのことだ。男の子が死ななかつたらもう三十になっているはず。ルオー老はふりかえる。道の上にはもうなにも見えなかつた。

(80、下線は筆者；生島訳 39 頁)

「男の子が死ななかつたらもう三十になっているはず」——ルオーの息子の話は、物語全体でこの一文のみであり、この息子について詳細は分からないのだが、死んだ息子を思い出して、「死ななかつたら～歳だ」と思う姿はブルームを彷彿とさせる。第 4 挿話で、ブルームはミリーから来た、誕生日祝いへの礼状を読んで彼女の生まれた日のことを思い出した後、夭折したルーディに連想が移り、彼が生きていれば 11 歳になると回想する。

She [Mrs Thornton] knew from the first poor little Rudy wouldn't live. Well, God is good, sir. She knew at once. He would be eleven now if he had lived.

(4. 418-20、下線は筆者)

ブルームに対応する『ボヴァリー夫人』の登場人物はルオーではなくシャルルなので、厳密な対応関係ではないが、ブルームとルオーがその昔、息子を亡くした経験を共有していること、また、二人とも「息子が死ななかつたら(生きていれば)～歳だ」と考えることから、彼らの間にも共鳴関係が認められる。

以上、登場人物の対応関係、およびマルヴィとルーディをめぐるテキストの共鳴関係を確認した。これらの点から、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』を強く意識して書かれたことは明らかであり、本書を『ボヴァリー夫人』のパロディとして読むことには十分正当性があると言える。

3. 『ユリシーズ』の謎を解く

それでは、『ユリシーズ』の謎を解いてみよう。『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディになっていることに気付くと『ユリシーズ』をどのように読むことが出来るだろうか。

まず、モリーの初恋のマルヴィがどこからきているかについては、上述の通り、ノラの昔の恋人ウィリー・マルヴァから来ていることは明らかである。しかし、軍人というステータスには、エマがでっち上げた軍人の恋人の影響があると考えられるため、『ボヴァリー夫人』からの色付けがある。

また、ブルームの息子ルーディの夭折については、ノラの流産という体験の影響が大きいと思われるものの、そればかりではなく、『ボヴァリー夫人』における二点——ボヴァリー家の家族構成が夫妻と娘一人であること、またルオーの「男の子が死ななかつたらもう三十になっているはず」という言葉がブルームの意識に変形されて紛れ込んでいること——からの影響も見逃すことはできない。

ところで、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディだとすれば、その他の重要事項についても解釈が深まる。そもそも、なぜモリーの恋人はプレイボーイのBlaze Boylanなのだろうか⁵。『ユリシーズ』では、モリーがボイルンと関係を持つに至る経緯がよく分かるように説明されているわけではない。彼らがデートをする事態に至った理由が明確に示されないまま、情事が行われてしまうのだ。なぜこのような事態になっているかについては、読者が探偵のように必死になって断片的な情報をかき集めて推測する他ないが、それはあくまでも推測や解釈であり、読者によって様々な読み方があり得る。『ユリシーズ』は出来事の因果関係が分かりやすく示されないため、物語として読むことが極めて困難な物語なのである。

物語として読むことが難しい『ユリシーズ』であるが、これが『ボヴァリー夫人』のパロディであることに気付くならどう読めるだろうか。このことに気付けば、ボイルンには、その原型としてRodolphe Boulangerというとんでもないプレイボーイがいることになる。そして、ボイルンの深層にロドルフがいると気付くことさえ出来れば、モリーがボイルンのような男と関

係を持つ筋書きがあらかじめ決まっていることなるため、この事態に至った理由はそれほど重要ではなくなり、むしろ、原テキストがどのように変形されているかという方向に読みの関心がシフトするであろう。つまり、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディだと分かった途端、それまでの読み方——『ユリシーズ』を物語として読む読み方——が大きく転換し、別次元の読み方——パロディとして読む読み方——へと変わってしまうのである。

結

最後に、『ユリシーズ』を『ボヴァリー夫人』のパロディと見ることにより『ユリシーズ』の結末をどう解釈できるかを考える。『ボヴァリー夫人』は、結婚生活にあきたらない妻がブレイボーイや若い男との恋愛に走り、最後は破産して絶望のうちに自殺し、妻の死後、夫も妻の裏切りを初めて知って絶望のあまり死んでしまうという悲惨を極めた物語である。これに対して『ユリシーズ』は、同じく結婚生活に不満を抱えている妻がある男と恋愛関係になるものの、それを知っている夫は黙認し、妻も今日の男よりも夫の方がずっとよいとすら思って夫との仲直りを考えるという『ボヴァリー夫人』とは正反対の結末である。

この『ユリシーズ』の結末は、『ボヴァリー夫人』のような悲劇との関係でこそ意味が出てくるのではないだろうか。「何も起こらない結末」などではなく、パロディの力で悲劇を喜劇に転換し、すべてを笑いに変えている結末ではないか。一見、何も起こらないようにさえ見える不思議な肩透かしの『ユリシーズ』の結末にはそれほどすごいパワーが秘められているのである。

注

*本論は、2022年6月11日(土)、大妻女子大学において行われた日本ジェイムズ・ジョイス協会第34回研究大会でのシンポジウム「『ユリシーズ』批評を探る——アイルランド史とインターテクスチュアリティ」(司会兼講師: 田村章、講師: 河原真也、平繁佳織、新名桂子)における発表原稿に加筆・修正を施したものである。当日、会場よりいただいたご意見、ご質問に感謝申し上げます。

1. シンポジウムタイトルには、「インターテクスチュアリティ」が使われる一方、筆者の発表タイトルには、「パロディ」が使われていることについて説明する。厳密に言えば、伝統的な修辞法としてのparody(パロディ)とJulia Kristevaが1960年代後半に創ったintertextualitéの英訳intertextuality(インターテクスチュアリティ)とは根本的に違う概念である。パロディが、作者が効果をねらった修辞法で、作者の意図が前提となっているのに対して、インターテクスチュアリティは、「あらゆるテキストは他のテキストを吸収・変形させた、モザイク模様をした引用の織物である」(『最新文学批評用語辞典』62頁)ことが前提となっており、作者は「死」を宣告されて、読者に権力が移行しているのだ。しかしながら、1980年代、90年代になると、「インターテクスチュアリティ」が、クリステヴァの言うテキスト間の関係性のみならず、influence、quotation、allusion、パロディ等の伝統的な修辞法も含めて用いられるようになった(Baron 8-11)。このため、「インターテクスチュアリティ」に二つの相容れない立場が包含されることになって混乱が生じており、両陣営で論争が起こっている。

筆者は、『ユリシーズ』が『オデュッセイア』以外にも多くの原テキストを持つパロディ文学であるとの立場をとる。本論では、『ユリシーズ』のパロディ文学としての効果や面白さを論じるため、「インターテクスチュアリティ」ではなく「パロディ」を使う。

2. 『ユリシーズ』と『ボヴァリー夫人』のテキスト間の共鳴については、Richard K. Cross、Michael Mason、Scarlett Baron が重要な指摘をしている。しかし、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』のパロディになっていることの指摘は、筆者の知る限り、拙論「19世紀小説から「ユリシーズ」へ——フローベール、トルストイ、ジョイス」(2009)が最初である。
3. 引用はGabler版により、挿話番号と行数で示す。
4. 引用はGallimard版により、頁数で示す。翻訳は生島遼一訳を使わせていただいたが、一部改変したところがある。
5. 筆者は、拙論「なぜモリーの恋人はボイランなのか」(2001)において同様の問いを立てて論じた。ただし、この時は本論とは違う観点からの考察を行ったため、別の結論に至っている。

引用・参考文献

- Baron, Scarlett. *'Strandentwining Cable': Joyce, Flaubert, and Intertextuality*. Oxford UP, 2012.
- Brown, Richard. *James Joyce and Sexuality*. Cambridge UP, 1988.
- Budgen, Frank. *James Joyce and the Making of 'Ulysses' and Other Writings*. Oxford UP, 1989.
- Cross, Richard K. *Flaubert and Joyce: The Rite of Fiction*. Princeton UP, 1971.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Revised ed. Oxford UP, 1982.
- Flaubert, Gustave. *Madame Bovary*. Edited by Thierry Laget. Gallimard, 2001. (引用は本書を使用し、カッコ内に頁数で示す。翻訳は生島遼一訳を使わせていただいたが、一部改変したところがある。翻訳の頁数も示す。)
- Gilbert, Stuart. *James Joyce's Ulysses: A Study*. Vintage Books, A Division of Random House, 1955.
- Joyce, James. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler. Vintage Books, A Division of Random House, 1986. (引用は本書を使用し、カッコ内に挿話番号および行数で示す。)
- Kenner, Hugh. *Flaubert, Joyce and Beckett: The Stoic Comedians*. Beacon P, 1962.
- Maddox, Brenda. *Nora: The Real Life of Molly Bloom*. A Mariner Book, Houghton Mifflin Company, 2000.
- Mason, Michael. "Why Is Leopold Bloom a Cuckold?" *ELH*, 44, 1977, pp. 171-88.
- Pound, Ezra. "James Joyce et Pécuchet." *Mercure de France*, 156, 1922, pp. 307-20.
- . "Pound on *Ulysses* and Flaubert 1922." *James Joyce: The Critical Heritage*, vol. 1, 1902-1927, edited by Robert H. Deming, Routledge & Kegan Paul, 1970, pp. 263-67. ("James Joyce et Pécuchet" の Fred Bornhauser による英訳からの抜粋)
- 生島遼一「解説」ギュスターヴ・フローベール『ボヴァリー夫人』生島遼一訳、新潮文庫、1965年、451-58頁。
- 鹿島茂「ジョイスとフロベール」ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』III丸谷オ一、永川玲二、高松雄一訳、集英社文庫ヘリテージシリーズ、2003年、652-63頁。
- 川口喬一、岡本靖正編『最新文学批評用語辞典』研究社出版、1998年。
- 新名桂子「なぜモリーの恋人はボイランなのか」*Joycean Japan*(日本ジェイムズ・ジョイス協会)12号、2001年、26-34頁。
- 。「19世紀小説から「ユリシーズ」へ——フローベール、トルストイ、ジョイス」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』21号、2009年、17-24頁。
- 。「『ボヴァリー夫人』のパロディとしての「ユリシーズ」——笑い・パロディ・輪廻転生」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』33・34号、2016年、17-31頁。
- トロワイヤ、アンリ『フロベール伝』市川裕見子、土屋良二訳、水声社、2008年。
- フローベール、ギュスターヴ『ボヴァリー夫人』生島遼一訳、新潮文庫、1965年。

付録

ジョイスとフローベールの関係性を扱う文献リスト

(初版出版年順; ※印は上記以外で本論にかかわる文献)

- 1922 Ezra Pound, "James Joyce et Pécuchet," *Mercure de France*, 156, pp. 307-20.
- 1923 ※ T. S. Eliot, "Ulysses, Order, and Myth," *Dial*, 75, pp. 480-83.
- 1930 ※ Stuart Gilbert, *James Joyce's Ulysses: A Study*.
- 1934 Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses*, Oxford UP.
- 1948 Haskell M. Block, "Théorie et technique du roman chez Flaubert et James Joyce,"
(unpublished doctoral thesis, U of Paris, Sorbonne).
- 1959 Richard Ellmann, *James Joyce*, Oxford UP.
- 1961 ※ Weldon Thornton, *Allusions in Ulysses: An Annotated List*, U of North Carolina P.
- 1961 Haskell M. Block, "Theory of Language in Gustave Flaubert and James Joyce," *Revue de Littérature Comparée*, xxxv, pp. 197-206.
- 1962 Hugh Kenner, *Flaubert, Joyce and Beckett: The Stoic Comedians*, Beacon P.
- 1964 David Hayman, "A Portrait of the Artist as a Young Man and *L'Education Sentimentale*: The Structural Affinities," *Orbis Litterarum*, xix, pp. 161-75.
- 1967 ※ Julia Kristeva, "Bakhtine, le mot, le dialogue et le roman," *Critique*, 23, pp. 438-65.
- 1971 Richard K. Cross, *Flaubert and Joyce: The Rite of Fiction*, Princeton UP.
- 1972 ※ Richard Ellmann, *Ulysses on the Liffey*, Faber and Faber.
- 1977 Michael Mason, "Why Is Leopold Bloom a Cuckold?" *ELH*, vol. 44, pp. 171-88.
- 1985 Richard Brown, *James Joyce and Sexuality*, Cambridge UP.
- 1985 ※ Linda Hutcheon, *A Theory of Parody: The Teachings of Twentieth-Century Art Forms*, Methuen.
- 1989 ※ Zack Bowen, *Ulysses as a Comic Novel*, Syracuse UP.
- 1990 Klaus Reichert, "The European Background of Joyce's Writing," *The Cambridge Companion to James Joyce*, edited by Derek Attridge, Cambridge UP.
- 1995 ※ M. Keith Booker, *Joyce, Bakhtin, and the Literary Tradition: Toward a Comparative Cultural Poetics*, U of Michigan P.
- 2003 鹿島茂、「ジョイスとフロベール」ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』III 丸谷オ一、永川玲二、高松雄一訳、集英社文庫ヘリテージシリーズ、652-63頁。
- 2007 Scarlett Baron, "Joyce's 'holiday wisdom': 'Gustave Flaubert can rest having made me,'" *Genetic Joyce Studies*, issue 7.
- 2007 Scarlett Baron, "Gnomonic Structures: Flaubert's *Trois Contes* and Joyce's *Dubliners*," *Papers on Joyce*, no. 13, pp. 43-60.
- 2008 Scarlett Baron, 博士論文 (Christ Church, Oxford University)
- 2008 Scarlett Baron, "Flaubert, Joyce—Vision, Photography, Cinema," *Modern Fiction Studies*, vol. 54, no. 4, pp. 689-714.
- 2009 Valérie Bénéjam, "Joyce after Flaubert: The Cuckold as Imperfect Physician, the Writer as Physiologist," *JJQ*, vol. 46, no. 3-4, pp. 439-53.
- 2009 新名桂子、「19世紀小説から「ユリシーズ」へ——フローベール、トルストイ、ジョイス」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』21号、17-24頁。
- 2010 Scarlett Baron, "'Will you be as gods?' (U 3.38): Joyce Translating Flaubert," *JJQ*, vol. 47, no. 4, pp. 521-35.

- 2011 Finn Fordham and Rita Sakr, editors. *James Joyce and the Nineteenth-Century French Novel*, European Joyce Studies 19, Rodpi.
- 2011 Matthew Creasy, "Inverted Volumes and Fantastic Libraries: *Ulysses and Bouvard et Pécuchet*." *James Joyce and the Nineteenth-Century French Novel*, European Joyce Studies 19, edited by Finn Fordham and Rita Sakr, Rodpi.
- 2011 Scarlett Baron, "Radical Intertextuality: From *Bouvard et Pécuchet* to *Finnegans Wake*." *James Joyce and the Nineteenth-Century French Novel*, European Joyce Studies 19, edited by Finn Fordham and Rita Sakr, Rodpi.
- 2011 Valérie Bénéjam, "The Elliptical Adultery of *Ulysses*: A Flaubertian Recipe for *Succes de Scandale*." *James Joyce and the Nineteenth-Century French Novel*, European Joyce Studies 19, edited by Finn Fordham and Rita Sakr, Rodpi.
- 2012 Scarlett Baron, *'Strandentwining Cable': Joyce, Flaubert, and Intertextuality*, Oxford UP.
- 2012 Scarlett Baron, "Joyce, Genealogy, Intertextuality." *Dublin James Joyce Journal*, no. 4.
- 2016 Scarlett Baron, "In Pursuit of Fact: Joyce and Flaubert's Documentary Letter-Writing," *Genetic Joyce Studies*, issue 16, pp. 1-30.
- 2016 新名桂子、「『ボヴァリー夫人』のパロディとしての「ユリシーズ」——笑い・パロディ・輪廻転生」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』33・34号、17-31頁。
- 2020 Scarlett Baron, "Joyce's Art of Mosaic." *JJQ*, vol. 57, no. 1-2, pp. 21-34.
